

<随想>安積開拓と天皇の肖像

塩谷, 郁夫 / シオヤ, イクオ / SHIOYA, Ikuo

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

115

(終了ページ / End Page)

117

(発行年 / Year)

1994-07-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019771>

安積開拓と天皇の肖像

塩谷郁夫

ここ数年来、同じ学内の人々と安積開拓の研究会を結成して参加している。学内とは日本大学工学部で、私はその敷地内にある付属高校に勤務している。研究会の中心は安積開拓を計画し、推進した中心人物の中條政恒が口述筆記させた『安積事業誌』全十三巻の輪読を中心とした会である。『安積事業誌』は中條政恒自身の巻頭の自序で、著者は佐藤利貞と佐藤秀寿となっている。この二人物についてははまだ明確な点は明らかではない。ただ、中條政恒と密接な関係にあった人物と考えられる。この点については具体的に論述する場ではないので省く、二人は安積郡内の人物であるただけしておく。口述者の中條政恒は、作家宮本百合子の父方の祖父である。だからこの『安積事業誌』は、政恒自身の自伝的著作である。まだ印刷されて公的に出版されることなく福島県郡山市立中央図書館に保存所蔵されている。本文の用紙は和紙、それに毛筆によって墨書された

筆稿本である。自伝的著作と言ったのは、内容が中條政恒の上杉家米沢藩（現在の山形県米沢市）における幼少年時代からはじまり、北海道や樺太の開拓計画を進言して、ロシア帝国の北方進出を阻止して、日本の国益を守ろうとする積極的考えを持った青年時代、明治維新における戊辰戦の敗北、廃藩置県によって一八六九（明治二）年には福島県の役人として福島に移り住み、一八七三（明治六）年から大槻原開墾（安積開拓）に中心的指導者として活動した一八八一（明治一四）年までの苦闘した様子が述べられている。（その後の太政官、島根県、退官後の東京生活時代の記述はほとんどない）一八九七（明治三〇）年に一家をあげて安積（開成山）に移住して、一九〇〇（明治三三）年に病歿するまでが詳細に述べられた著作であるからである。

この著作は早い時期に中條家から離れて保存された形跡から、宮本百合子がこの祖父の著作を目にしたとは考えられない。この著作によって、日本における近代化——計画的農業の推進、そのための猪苗代湖から農業用水の獲得のために疏水の開削、それを利用した水力発電と紡績工場の設立等々——の思想的背景、その思想を持った個性の誕生の過程、思想の具体的実現の姿が明らかになる。また宮本百合子の文学の誕生の源泉にまで遡ることができる重要なものである。この本の研究と分析を一つの作業として会では行なってきた。それを、土木工学、政治学、経済学、歴史学、文学の面から検討して来たのである。その内容は日本大学工学部夏季講座として市民に公開して来ている。それを近日中に共同著作として出版する事になった。この本をまとめたことで、研究会は一応終止符を打つことにした。しかし、まだ完全に輪読は終了していないので、全十三

巻を読了した段階で脚註や解説、解説を加えて出版する事ができれば幸いだと考えて新しい形での研究会を続けたいと思っている。

この研究を通して、私の担当した部門は文学である。安積開拓——日本の近代化の歴史が——文学上にとどの様に描写表現されたかという問題である。この安積開拓の生んだ作家は、先に述べた中條政恒の孫宮本百合子であり、中條政恒の下で県の開拓掛として、開成山に駐在して住みつき、実務を遂行した立岩一郎（のち開成山桑野村第一代村長）の母方の孫久米正雄の文学作品の研究である。久米正雄は立岩一郎の娘幸子と久米由太郎の間に二男として長野県で誕生した。久米由太郎は徳川家旗本の子孫で、東京府士族の出身、若い頃に静岡県沼津から単身で上野の彰義隊に参加しようと江戸に向う途中捕えられたという逸話（信濃教育会編『教育功労者列伝』）がある人物で、福島県の教育制度の近代化のために安場保和（権令のち県令）に招聘されて、東京師範学校上等科得業生から県小学校教育講習所の訓導兼教場監事に就任して来たのである。県に在動中に立岩幸子と結婚したが、自由民権運動弾圧で有名な三島通庸県令時代（明治一五年）に辞職して長野県に移り、一八九八（明治三一）年上田町で自殺した。

この事件を題材にして描いた久米正雄の作品が『父の死』（『新思潮』大正五年二月）である。この父の死によって母幸子に伴なわれて正雄は開成山に移り住むことになった。正雄の祖父の家と中條政恒邸までは約百メートルほどの距離しかない。開拓道路を間にして向い合っている位置にある。

私の関心事の一つに、久米正雄が『父の死』を描き発表した一九一六（大正五）年は、天皇の肖像写真——御真影——が自殺するほ

ど重視されていたのだろうかという問題である。久米由太郎は旧幕府の士族である。勤皇派の出身者ではない。彰義隊に参加して幕府のために戦う決意をした時代に生きていたのである。いかに東京の師範学校において近代的教育法を学んだといっても、まだ天皇を神のごとく信仰する心とまで言わなくとも、忠誠心を持っていたとは考えられないのである。武士としての意地はあっただろう。正雄の『父の死』では割腹自殺として描かれている。天皇その人でなく、その影像——写真——に殉ずるなど信じられぬことである。

一九一二（明治四五）年の乃木將軍の殉死という事件の以後はいざ知らず、まだまだその様な意識は民衆の中には存在しなかつたろうと推察されるのである。まして、自由民権運動の思想に共感（推測だが）していたと思われる人物（三島県令に辞職届を提出した）が、天皇の写真に殉ずるとは考えられない。筑波常治著『明治天皇』（角川新書一九六七年）を読んでも、明治期の民衆と天皇の関係は皇帝と下臣の関係などでないのである。明治天皇は新開拓地の開成山へ東北巡幸に際して訪ねている。そこでは神様のごとき扱いはしていない。ただ、開成社員という安積開拓事業に出資した人たちが、急遽横浜へ洋服のフロックコートや山高帽子などを注文して着用して面接した時の写真が残っている。神格化した天皇に会うためではない。開成山開拓地に住む一農民が乗馬で通る天皇に自分の畑で作った大根を献上したという記録があり、その地が現在では菜根という地名となっているといった様なことはある。しかし、当時の民衆が天皇を神格化したとは信じられない。この様な事から久米の『父の死』は御真影焼失の責任としているのを批判する岩本努著の『御真影』に殉じた教師たち』（大月書店）の説は妥当だと思ふ

のである。大佛次郎の作品『天皇の世紀』（朝日新聞社一九六九年）を読んでも天皇の神格化は明治期にはまだない様に思われるのだ。

この描写が天皇の神格化と結びつくと思われれば、一九一一（明治四四）年の大逆事件による幸徳秋水等十二名の死刑という国家権力によるフレームアップに端を発しているのではないのか。知識階級には石川啄木の「時代閉塞の現状」を生み、民衆には主義者への恐怖と天皇神格化を与えた。明治政府の目論みは着実に完成していったと思われる。

次に中條（宮本）百合子の習作『農村』（一九一五年）には、開成山の貧農の家の壁にはられた天皇の肖像の描写がある。久米の『父の死』の一年前の作品である。しかし、この作品において百合子は直接に「天皇の肖像」とは述べてはいない。けれども読む者には「天皇の肖像」と直ぐ理解できるのである。その日の食物にも困窮した民衆にとっては、天皇の肖像など、この程度のもとする描写をなしている。「壁に張った絵紙を大方はその色さえ見分けのつかないほどにくすぶって仕舞って居て、片方ほか閉めてない戸棚から夜着の、汚いのがはみ出て居るわきの壁には見覚えのある高貴の御方の絵像が、黄ろく、ぼろぼろに張りついて居るのである。」と描き、つづけて貧農の子供たち五人が炉に掛った鍋の食物の煮えるのを熱心に見守っている様子を「何となしに空恐ろしい様な気持を起させる。」と表現している。

この部分は『中央公論』誌上に発表された処女作『貧しき人々の群』では完全に欠落していて、実に単純な形で「すべてのものが、むさ苦しく、臭く貧しいうちに、三人の男の子が炉辺に集って、自分等の食物が煮えるのを、今か今かと、待ちくたびれている。」と

なっている。リアリティの後退を感じさせる。

開成山の開拓地には、明治天皇は明治政府高官と一緒に二度も訪れているのである。昔は行幸と呼び尊ばれた。おそらく開拓地の農家に天皇の肖像画が配布されたのが、壁に張られて生活苦の中で粗末に扱われた状況を写實的に描いたのである。久米の『父の死』は天皇の肖像を焼失するという粗末な扱いの責任をとった死を描いたのである。

天皇の肖像について論じた著書に多木浩二『天皇の肖像』（岩波新書）があり、肖像の大衆化から次第に神格化にいたる様子を述べている。それは「御真影」の拝戴という儀式として定着したという。皮肉なことこれにこれを理論化した『日本道徳論』を著した明六社同人の西村茂樹は、百合子の母方の祖父であった。

安積開拓と深い関わりのある二人の作家、久米正雄と中條（宮本）百合子が、期せずして初期作品の中で、それも同時期に天皇の肖像をめぐる描写を展開しながら、観察眼の違いが、トルストイ文学を手本にしたがら異った文学を生み出した。安積開拓に関係した作家の視点について、天皇の肖像という一点に絞っての感想を述べてみた。日本の近代化とはこの様な面も持っていたのである。

（しおや　いくお・一九五六年卒）